

「等身大」のマルクスとどうつき合うか

一人一人が「古典」と向き合う時がやってきた



いまむら ひとし 東京経済大学経営学部教授。1942年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。専攻は社会哲学・社会思想史。著書に「排除の構造」など。

出席者 今村 仁司
加藤 哲郎
山田 鋭夫

ソ連・東欧の社会主義体制崩壊後、マルクスの「旗色」がわるい。しかし彼は死んだのではなく、あらゆる呪縛から解放されたのだ。いまこそ、マルクスは一人ひとりが向き合うべき人間として目の前にいる——。

今村 ポスト・マルクス主義を展開する時に一九八九年の東欧の大変動と九一年のソ連邦の解体という世界的な大事件との関連がまず想起される。なぜ東欧変動が起こり、次には社会主義体制が政治的レベルでも経済的レベルでも失効宣言を受けたのか。この問題を議論した後、ソ連

真のマルクス主義の危機とは

に対する受け止め方をどうすべきか、考えたい。これら二つの事実からいえることは、非常に多くの民衆が社会主義なるものの思想も体制も拒否したということでしょう。加藤さんから伺いたい。

加藤 いまマルクスを考える前提として、現在がある種のイデオロギー的な空白期であるといいたい。F・フクヤマのような歴史の終焉論も出ていますが、たとえていうなら、いまわれわれは一七八九年から四半世紀続いたフランス革命期に匹敵する世界史の激動・再編の最中にあると思う。崩壊した東欧やソ連では、当然のことながら国家イデオロギーであったマルクス・レーニン主義に対する反発がある。私は東欧・ソ連の激動を市民革命と位置づけ、グローバルな市民社会の形成、デモクラシーの一步前進と論じてきた。しかし日本では、戦後の知識人世界でソ連・東欧型マルクス主義がある時期まで大きな影響力を持っていた。それで逆に大きな衝撃になっている。私の見る限り、多くのマルクス主義者は、沈黙ないし茫然自失してい

座談会

る。さまざまな議論はあるが出口を見いだせないでいる。そういう意味でのマルクス主義の危機がある。

一方、ヨーロッパ・マルクス主義やアメリカはその中間です。つまり、東欧・ソ連の崩壊以前にスターリン主義、レーニン主義から離れ現代資本主義を分析するさまざまな理論枠組みが探究されていた。これは私の専攻する政治学の分野でのマルクス・ルネサンスに顕著だし、経済学の分野では山田さんが研究しておられるレギュラシオン学派もそうです。そうした土壌が一九六八年の社会運動およびその後の知的な運動の中で形成され、アメリカにまで広がっていた。ネオ・マルクス主義の動きですね。さらに、マルクスをも一つの理論的源泉とする社会民主主義の潮流があり、それがいわゆる福祉



かとう てつろう 一橋大学社会学部教授。1947年生まれ。東京大学法学部卒業。専攻は政治学。著書に『国家論のルネサンス』など。



やまだ としお 名古屋大学経済学部教授。1942年生まれ。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了。専攻は理論経済学・経済学史。著書に『レギュラシオン・アプローチ』など。

国家型の社会をつくり、定着させてきた。つまり、ヨーロッパの場合、理論的にはソ連・東欧のマルクス・レーニン主義とは異なる諸潮流が根づき、実践的にもソ連・東欧より公正な社会や国家をある程度形成してきたため、理論的衝突は日本に比べればずっと軽微ですんでいる。日本のようにペシミスティックになつたり、沈黙するという状況にはない。

むしろ、エコロジィやフェミニズムなど、新しい社会運動の勃興と運動し、EC統合の実験と並行して近代の意味を問い直す一環として、マルクス主義にどんな問題があったのかを問う理論的な反省期に入ったと思います。

なぜ国家イデオロギーに？

山田 東欧・ソ連問題を加藤さんが市民革命と位置づけるという観点には僕も大賛成です。市民社会を忘れた社会主義、あるいは市民的欲求の抑圧の上に立った社会主義だったことは否定できない。東欧・ソ連の崩壊の背後には、もちろん物的不満もあるが、根本的には市民的欲求のあらわれがあった。ごく普通の人間で、普通の自由を抑圧した社会主義

がついに潰れた。市民的欲求というものは、社会主義であると資本主義であるとを問わず、大きな人類史の目でみたら、不可逆のプロセスだと思ふんです。そういう意味では、五〇〇年、六〇〇年、あるいはもっと長く見てもいいが、そういう長い人類史の中における市民的なものの実現にとっての一つの革命的な転化が八九年、九一年の東欧・ソ連における激動だった。

だから、マルクス主義なるものを標榜した政党なり国家が、そういう市民的欲求なり市民的なものへの抑圧の体系として君臨してしまった、というこの二〇世紀の悲劇、これはやはり大きな問題としてある。

関連していうと、マルクス主義はそれによって退潮したのかということだが、市民に抑圧的なソ連社会主義や、ソ連をよりどころとした党和国家のイデオロギーとなったマルクス主義は、明らかに退潮しているわけだし、退潮すべきだと思う。しかし、マルクスが党とか国家とか権威とかに依拠した教義体系として読まれるのではなく、一人ひとりが自分の古典としてマルクスに向き合い、自分の抱えている問題を解決するときの考え方の一助としてマルクスを

読むためのいい契機ができた。

それは、一人ひとりの問題であるにとどまらない。たとえ学会レベルでも、国家イデオロギーにならぬような形でマルクスの着想をも現代に生かす動きが出てきている。たとえばレギュレーションとかSSA（米国のラジカル・エコノミクスの一派）といった動きがそうだ。また最近では、ヨーロッパで、新制度派経済学というマルクスの着想を生かした一派が出てきている。そうした経済学における新しい動きは、ソ連・東欧の崩壊と明らかに連動している。そういう潮流がやっと出てきたというのが現状ではないか。

今村 思想の側面に限っていえば、ソビエト・マルクス主義が国家イデオロギーになっていかざるを得なかったのはなぜなのかについて、まとめておきたい。つまり、ロシア民族の思想的体質みたいなものを、ソビエトだけではなくて一九世紀以降の流れの中で確認したい。

一つの仮説だが、結論を先取りすると、ボルシェビズムというのは世上、マルクス・レーニン主義、つまり、マルクスの思想とレーニンの思想をイコールで結びつけて全世界に流通してきたわけだが、僕は「マル

クス＝レーニン」というのは二〇世紀の一つの神話だと思っている。ボルシェビキはプロレタリア革命をいながら、実際に、プロレタリアへの独裁という形で社会建設した。プロレタリアの独裁なんて、ロシア革命の瞬間にはあったが、プロレタリアートに対するボルシェビキの独裁という形に収斂していった。プロレタリア独裁というのは純粹のデモクラシーだったと思うが、そういうものでないほうに転換していった。

たとえば、チェルヌイシエフスキーの思想を見ると、人民に奉仕して自己犠牲してでもやるという敬虔な誠実さと同時に、実はやっている革命家たちが人民を理想主義の下で鑄型にはめ、指導していくという側面も持っていて、レーニンの「組織論」の中に比較的そういうったものが悪意ではなくて素直にナロードニキの伝統として出ている。そういう思想的環境があったとしてもスレギンを得なかった。西欧思想家のマルクスから、たとえば経済的理論、政治的理論という抽象的なレベルでは比較的学べるが、思想体質というのは学べるものではないでしょう。たとえば、いま山田さんがいわれたような市民社会的な発想法とかエート

スを身につけるといのは、学んで学べるものではない。

そういう文化的伝統にスレがある中で、レーニンはたとえばマルクスのパリ・コミュニケーション論を読んだと思うんです。しかし、その中には民主集中制というものはない。それを、マルクスの思想であるかのようにレーニンも知らぬ間に無意識に読み替えて、中央集権的な形でまとめていって、それに民主主義という名前をつけるだけで十分だというふうな（笑）、無意識な読み解きの動きがあった。それはすでにレーニンに始まっていて、レーニン以降はまったくそれを固定化してイデオロギー化していくという流れになったのだと思う。

「本当のマルクス」とは何か

加藤 しかし、国家主義や集権主義を受容する構造が、西欧を含む二〇世紀の思想総体の中に含まれていないのか。ロシア型・レーニン型のマルクス理解を生み出すような土壌が、マルクスをも含む一九世紀思想の進歩や科学の観念の中にはなかったかという問題を、やはり追究する必要がある。

山田 ロシア的風土のゆえにロシア・マルクス主義のような形でマルクスを受け取ってしまう、レーニンの解釈をしてしまうという問題点は非常によくわかる。それに対する批判をこめて実は日本のマルクス主義の歴史の中でも、たとえば一九六〇年代末から七〇年代あたりは、「原マルクス」に戻れ、「マルクス原像」に戻れ、と盛んにいわれた。「本当のマルクス」はこうだ、それをロシア・マルクス主義が歪めてしまったと。レーニンとマルクスは違う、それどころかエンゲルスとマルクスも違う、という形でやってきて、マルクスのコアのコアは何かを問うた。いわば「原マルクス」でもってロシア・マルクス主義等を批判する動きがあった、幕場のマルクスは泣いているぞ（笑）、という議論があったでしょう。

それに対して、マルクス没後一〇〇年のころ、つまり一九八三年ころから、やはりマルクス自身に問題があるのではないのか、という論調が出てきた。マルクス自身の中に、そういうソビエト型社会主義などを生み出す要素があるのではないか、というわけだ。「本当のマルクスはいいが……」から「本当のマルクス

自身も問題だ、墓場のマルクスよ、お前も悪いのだという論調への

転換。僕は正直いってこの問題に決着をつけられないでいる。

「等身大」のマルクスが戻った

今村 いま山田さんがいいかけた、マルクスの中にも何か重大な欠陥があったという問題に移りたい。それ自体を、われわれ自身はつきき出して自覚する段階にきている。それを最近の事件がわれわれに突きつけてきている、そういうことだと思ふんです。じゃ、どういう難点があるのか。

加藤 政治学の方からすればこうです。マルクス自身の中にもおそれくは存在した、たとえば土台・上部構造論に代表される——われわれは経済還元主義という言い方をしますが——経済主義的なアプローチ、それから階級還元主義というか、生産手段の所有、非所有という分岐線で政治がすべて動いていくかのような理論が存在することによって、逆に民族の問題、宗教の問題、あるいは男性と女性のジェンダーの問題などを解明できなかった歴史を持っています。ですからネオ・マルクス主義的な政治理論が西欧で勃興してくる際に、まず最初に依拠したのはグラム

シのヘゲモニー論であり、またアルチュセールの構造主義で、政治の相対的自律性を説明することでしたが、やがて絶対的自律性や言説理論を説くポスト・マルクス主義が現れてくる。

その意味では、政治理論の側からみれば、経済還元主義や階級還元主義に代表される還元主義（リダクションニズム）の問題が、はたしてマルクス自身に起因するものかということだが、方法的には大きい問題となる。それは思想的には、ある種のモノイズム（一元論）なりホーリスム（全体論）の問題といていいでしょう。

つまり、社会をトータルに把握する理論なり思想として、マルクス主義は非常に魅力的だが、それが同時に一つの理論的・思想的な呪縛になりがちだというシレンマがある。

今村 僕たちは歴史的に規定されてものを考えていますね。やはりロシア・マルクス主義の影響力は非常に強くて、ロシア・マルクス主義が解釈したマルクスというものにも

すごく依拠して、全世界はロシア革命後七十年間考えてきた。山田さんがいわれたように、ロシア・マルクス主義的に解釈されたマルクスをつくってにおいて、今度は逆にマルクスの中に問題があった、という読み方もしがちなところがある。ですから、ロシア・マルクス主義がつくったマルクス像というのはどういふものであって、それと一九世紀に生きたマルクスの思想との微妙な差異をハッキリさせておくべきだ。

ただ、マルクスはこの七十年間、クレムリンの捕囚、にあつて、いわばとらわれの身になっていった。マルクスには本来いろいろ問題があるが、ソビエト体制にとつても原理上は非常に危険な思想家であるわけで、骨抜きにせざるを得なかった。だから、骨を抜いて適当に国家イデオロギーになるように作り変えられた。それは無意識にやられたし、ヨーロッパの全共産党が似たようなことをやって、いわばクレムリンの捕囚をどんどん強化した。いまはマルクスが捕囚から解放され、鎖から解かれた巨人みたいになった。いや、巨人なのかどうかも吟味をしなければいけないが、解放されて、われわれはある種の二〇世紀イデオ

ロギーから距離をとれるような状況になったのは事実だ。

『資本論』と現代との差

山田 そうですね。いってみれば、おそらくあらゆる社会科学の古典というのは何らかの欠陥があるのは当然で、たとえばマルクスにもその欠陥の要素はあっただろう。

いま今村さんがいわれた鎖につなげられ、とらわれの身であったマルクスということでは、マルクス・レーニン主義という形のもと、マルクスが聖典でありすぎた。「古典」ではなく、あまりに「聖典」でありすぎ、無謬で絶対で、教義体系になって解釈権が独占されて……、というのがいままでだった。やっとこれで普通の古典に戻って、一人ひとりが自分の問題関心に応じて、自分の生きる現場でそれを生かして使うという素地ができたのだろう。

加藤 簡単にいうと「等身大のマルクス」です。政治学や国家論では、マルクスをまさに「等身大」に戻して、そこで学べるものを学んでいけばいい。マルクス自身は体系的業績を残していませんから、わりと軽やかに相対化して扱うことができ

る。問題は経済学でしょう。マルクスは一九世紀の資本主義を問題にし、分析したという歴史的制約がある。そこで解き明かした資本主義の論理のなかで、一体何が生き続け、何が問題であったのか。

山田 何が生き続けるかを考える前に、いままで経済学のレベルでマルクスはどう扱われてきたか、ということをもまず明確にしたい。その点、加藤さんのいわれるとおり、経済学は悲惨だった。マルクス経済学では普通、『資本論』が発点になっていた。『資本論』は資本主義の基本構造、一般法則を明らかにしたものだ、資本主義の原理論を明らか



加藤 「政治学や国家論では、マルクスをまさに、等身大」に戻して、そこで学べるものを学んでいけばいい」

にしたものだ、という大前提です。しかし二〇世紀のわれわれは、『資本論』が対象にした時代と現代は明らかに違うということはおわかってい

るわけです。では、その『資本論』と現代の差をどうやって埋めるのか。資本主義の基本法則が、二〇世紀になって独占資本が出てきて独占資本主義の法則に歪められた。さらに一九三〇年代以降、国家が乗り出して国家独占資本主義になった。国家が乗り出してさらにその法則が歪められた。このように、『資本論』、独占資本主義論、国家独占資本主義論という積み重ねを、僕は、三段階積み重ね主義、と悪口をいっているが、とにかくこういう形で『資本論』という守るべき大前提と、それから変わった二〇世紀の現実とをつなげようとしてきたわけです。つまり『資本論』は、依然として資本主義の一般理論、一般法則を明らかにしているというのですが、これは間違いだらう。

マルクスが『資本論』で解明したのは一九世紀の資本主義であるのに、——その『資本論』は「古典」としてまだ学ぶべきものがいっぱいあるが——およそ二〇世紀まで貫徹



山田 「『資本論』は、依然として資本主義の一般理論、一般法則を明らかにしているというのですが、これは間違いだらう」

する資本主義の一般理論というように置いたのが、日本の伝統的マルクス主義の大間違いだと僕は思っている。

マルクスの個々の理論は、現代でも一般法則として貫いていると強弁するのでなく、マルクスのな見方・視角を現代理解に応用することが必要ではないか。たとえばスミスとマルクスを比べてみるといい。これは内田義彦さんがいっていることだが、スミスもマルクスも近代資本主義のうちに、ほかの社会と違った二つの特徴を見ていた。一つは、社会的生産力が膨大に発展しているという事実。それともう一つは、階級的

搾取なり支配があるという事実。

その二つを見て、スミスが問題をどう立てたかというところ、近代社会は階級的搾取があるにもかかわらず生産力が発達して豊かだ、それはなぜなのかと。それが『国富論』の体系で、それは分業が発展しているからだというわけだ。ところが、マルクスでは、問題の立て方が逆になっている。つまり、せっかくの豊かな社会的生産力がなぜ階級的支配、貧困、恐慌、失業等を生むという形でしかあり得ないのかと。これを現代に引き取っていえば、たとえば経済成長がなぜ環境破壊や南北問題を生み出す形でしかあり得ないのかとか、いくらでも応用できる見方だ。

だから、経済学の分野でマルクスがやったことの何が生き続けるかといえ、そうした彼が立てた基本的視角を現代に生かすということであって、『資本論』体系を墨守し、それを具体化することではない。そのほかにも、社会を労使関係で見たというの、ほかの経済学にはないマルクスのいい面。また、資本主義は新古典派が想定するように、単に平穩無事な市場均衡する世界ではなくて、矛盾とか恐慌、大きな構造変化を伴いながら動いていくのだ、とい

うのもマルクスのすぐれた視角だ。そういった視角を現代において学び直すということが必要だ。

「経済学批判」は何のため

今村 マルクスが本当に相対化されて、もっと自由に読めて、かえってマルクスのよさが生かせるという視点だと思うが、それには僕も賛成だ。もうちょっと極端にいうと、こうなる。「資本論」の第一巻には「経済学批判」と書いてある。テーマは資本ですよ、と書いてある。経済学批判って何だという。マルクスははたして、山田さんが前提にしておられるように、もう一つ経済学をつくらうと考えたのかどうか。

たとえばマルクスは、ドイツ語でビッセンシャフトということを繰り返すというが、あれは英語やフランス語に訳せない。あれを「サイエンス」と扱えた途端に、普通のワン・オブ・ゼムのサイエンスの一つとなるのだが、どうやら、それは違うのではないか。マルクスはそういう何か新しい知のあり方を模索しようとしたのだが、二〇世紀はそれを、材料が経済ということから、『資本論』というのは経済学の本であると

いう大いなる錯覚をやった可能性がある。普通、経済学だったら、たとえばリカードの題名を見ればわかるように、「プリンシプルス：…」と必ずつける。あるいはドイツ風にいえばグルントリニエンとか、つけるのが普通の文化科学としてのサイエンスの常套だ。それなのにマルクスは一度もそのようにつけていない。「クリティーク」を「経済学批判」と訳しているのも、僕は半分正しいが半分誤訳だと思う。あれは現実の政治・経済というシステム批判であると同時に、政治・経済についてのイデオロギー的な知であるところのポリティカル・エコノミーの批判で



今村 「マルクスははたして、山田さんが前提にしておられるように、もう一つ経済学をつくらうと考えたのかどうか」

ある——それは政治と経済が二つ一緒にあって現実になっているのだから、両方分析することによって現実に対する新しい分析の理解の道を開く、という学問観を彼は模索していたのだと思う。『資本論』を経済学の書とみた瞬間に、マルクスの新しい試みは、いわば握りつぶされたというのが僕の考えなんです。ある意味ではマルクスのビッセンシャフトというのは、一九世紀のあの瞬間においてあったどの領域にも属さないような、新しい知への跳躍を考えたのだ、ともいえる。マルクスをいまだう読むかというのは、そこらへんまで徹底して考えてみないと、救えないところがある。

加藤 私も、マルクスはトータルな知を探究した、全体性を志向したと思う。全体知に対する種の体系的で魅力的な視角なり考え方を提供しているという意味で、マルクスが読まれてきたのは事実だと思うし、またマルクスの中に文化理論か

ら政治理論、イデオロギ論に至るいろいろな問題を読み解く知的源泉がある、インスピレーションに満ちているということは、今日においてもなお正しいだろう。

ただ、マルクスはそれを「ダス・キャピタル」として、「資本」という主体を設定し、その資本の運動の展開の中ですべてが解けるように問題を設定した。つまり、トータルで重層的なものを一元的に了解できる知的世界の端緒を「経済学批判」体系というのでつくり出したという側面がある。しかし、はたして近代社会なり今日の社会がキャピタリズム——マルクス自身はキャピタリズムという言葉を使っているが——の運動にによって構成される社会ということでのどの程度に理解しうるのか、産業化も情報化も、官僚化と民主化さえもが資本主義化として、資本・賃労働関係の展開としてベグライフェン（把握）できるかというのか、という問題が今日ではあると思う。

マルクス・ビッセンシャフト

今村 キャピタルという形では、この社会が動かないということは、

同時に政治理論のほうにも反応していく。マルクスはいろんなところに

キャップ、キャピタルというのがほとんど蔓延していくようなあり方に発展させ、引き延ばせるような可能性を、実は経済資本を論ずる中で事実上切り開いていった可能性がある。経済資本と同時にインダストリアライゼーションもそうだが、これをやりながら組織をつくっていくと、小さい企業体でもやはりキャップをつくる。そのような政治における政治的キャップ化というように、読み、を誘うような理論構成を、マルクスは実は事実上、あの『資本論』というテキストでやってしまっているというのは、巨大な可能性としてむしろある。そういう読み方すらできる。すると、山田さんが限定されているような、マルクスの経済学といった途端に、その可能性がむしろ狭められることになる。

山田 いま山田さんはキャピタルを読み直す一つの「形」を述べられた。これは今村さんの「古典」としてのキャピタルの姿であるわけで、キャピタルをもういっぺん位置づけようとする営みだと思えます。つまり、そのことは、経済原論のテキストとなった『資本論』をいかに克服していくかという問題を生み出すわけです。

加藤 政治学の世界ですと、等身大になつて、「社会による国家の再吸収」の思想など、なお学ぶものが多いマルクスであっても、それで完結するのか、という問題がある。先ほどのダス・キャピタルを、イデオロギーや政治の理論でもあり、社会関係全般の理論であると読み直したとしても、そこに歴史的制約が出てくる。山田さんがいわれたように『資本論』が一九世紀資本主義の問題にしていたことと、われわれが二〇世紀末の政治なり社会なりを問題にしていることとのズレの問題が一つ。またウェーバーやパソンズとかフーコーなど、その後のさまざまな理論的な巨人の中に置いてみた場合のマルクスの位置という問題は、やはり出てくるだろうと思ふ。

そのとき、エルネスト・ラクロウらの、いわゆるポスト・マルクス主義を唱える人々は、マルクスがヘーゲルをのり超えたようにマルクスを超える、といういい方をする。私は、マルクスは一九世紀の歴史的現実と思想的な巨人たちと格闘しながら自分の枠組みをつくったのだが、いまマルクスが生きていたら、一体どんな問題を設定し理論構成をする

のだろうか、という発想をするんです。そういう観点で、現代に肉薄する総合的社会理論・歴史理論を構想しようとする、マルクスの射程をどう考えるべきか、どのくらいの比重で扱うべきか、という問題は残るような気がする。

さまざまなテストが必要

山田 マルクス一本やり主義でいいのかという問題がある。いままでの伝統的マルクス主義は、マルクス一本やり主義もいゝとこで、しかも一面的に理解された。つねに他の巨大な思想家とつきあわせながらマルクスを考えることが必要だ。マルクスがあらゆる社会科学の共通の価値尺度であり、流通手段であった時期があったばかりに、マルクスだけやっていけばいいという悪習ができてしまった。他とつきあわせつつ「なぜマルクスか」を問うことなしに、「マルクスはこういっている」で済ますようになってしまった。

その点、実は、日本の戦後においても経済学史研究のなかですつと反省があった。だから経済学史のテーマとして、「スミスとマルクス」とか、「ウェーバーとマルクス」とい

う形で問題をずつと立ててきた。そこにあった問題というのは何だったのか、それを反省してみる必要がある。僕はさっき、マルクスの社会的見方といったけれども、マルクス派の人はそういうマルクスの問題設定だけでいいのか、ということも考えておく必要がある。同時に、マルクスを排除する人は生産力万歳、近代化万歳という形になるんだが、そういう人たちに対しては、じゃ、マルクスのな問題設定をすり抜けてしまっているのか、という問いがつけつけられている。

今村 いずれにせよ、マルクス一本やり、つまりマルクス主義という形での教義体系の時代は終わった。マルクスというのはピッセンシャフトを考えた人なら、これからは、二つの側面で限定して彼の仕事を考えねばならない。一つは哲学であり、一つは科学だ。それに対して疑似宗教的なものをつけて、それに頼って政治をやるのだ、国家を建設するのだ、そういうのはやめておけという時代に入った。

マルクスの科学がもし生かせるとするならば、いっぺんテストをしてみる必要がある。それは社会科学に限定するわけだが、二〇世紀は非常

に重要な科学的革新が起きた。人類学、精神分析学、言語科学、記号学などさまざま。それらとつきあわせて、マルクスの仕事にそれと匹敵しつつ、生産的に、影響を与えつつ動くのかどうかということのテストをやっておかねばならない。これが一点。

その場合に非常に重要なのは、たとえばフロイディアン革命以後を例にとると、マルクスを読む場合にもやはりフロイトの目で読み直してみ、あるいはフロイトの中にマルクスの目をぶち込んでみる、という操作が絶えず必要になってくる。これは、一九六五年以降に大体全世界的にその第一歩が踏み出されたと僕は考えている。

一方、マルクスの哲学はどういう哲学であったか、というのとはなかなか難しいが、マルクスの哲学はどの程度において普遍性を持ちうるか、ということをやヨーロッパ形而上学の伝統の中で確認するという仕事が、今度は逆にわれわれに押し寄せてくるようになった。

ハイデッガーに至るまでのヨーロッパ人がやっていたような仕事を引き込んだ形で、ヘーゲルはどうであったか、マルクスはどうであったか、

か、そこらへんまでやらないと、もうマルクスは読めないという時期にきていると思うんです。

加藤 二〇世紀は、マルキシズムの世界化の時代でした。いわば西欧に生まれ、ロシアで教典化したマルクス主義が世界中に広がり、世界中でテストされてきた時代だった。その系譜でいま残っているのはアジアのごく一部という、変な形になっているのだが。その観点で、たとえば日本でマルクスがどのように受容され生きてきたのかというテストとか、あるいは、なぜ中国には毛沢東主義という形でマルクス主義が生きて残ったのか、アフリカはどうだったのか、ラテンアメリカはどうだったのか、そういう領域別のテストみたいな問題もあるのではないか。

世紀末までは混乱状態か

今村 二〇世紀マルクス主義はダメだとさっき言ったが、そのなかには、単にマルクスを担ぐだけではなく自分のものとして見ていて、マルクスに対してある意味では致命的な批評を加えながら切り開いた先駆者がいた。そのこともやはり強調しておかねばならない。

一つにはグラムシの問題がある。ドイツにはアドルノやその他があり、フランスにはアルチュセールがいる。彼らの仕事も、マルクス主義者というよりも、マルクスから離れることができないほどの巨大な何ものかがある、ということとをわれわれに知らしめた遺産を残している。これはとくに哲学・思想の領域だ。だから、何もかもバーだったということとはいえない。

加藤 いずれにせよ、ソ連・東欧型のマルクス主義が死んだことが、理論的・思想的な意味での神話からの解放、多元的・重層的で開放的なマルクス読解の契機になるという大状況が依然として続いていると思います。ただそれが、冷戦の崩壊とかフクヤマ的な歴史の終焉論と対峙してどういう方向に向かうかについては、実に多様だろう。その意味では、行き先がまだまだ見えない状況がおそらく一〇年、世紀末までは続くだらうと思います。

山田 経済学でもそうなんで、要するにマルクスだけやっていけばいいのだというのは、マルクスには何も書いていないからダメだ、ということのまったくの裏返しなわけですよ。二つとも怠け者根性だ。やはり

現代というものに真正面から取り組もうとしたならば、必ずさっきいったような意味でのマルクスの問題にぶつかるとしてポジティブなもの、なぜネガティブな形でしか表れないのか、という問題は必ず出てくるわけで、そういう問題にぶつかったときに、マルクスを教条的に適用するのではなくてマルクスを再発見していく。

たとえばレギュラシオン理論でいえば、現代社会を解くなかで、マルクスの中にあつたところの資本と賃労働の関係を問う視角をもういっぺん豊かに直していくとか、マルクスの持っていた資本主義の矛盾性に対する認識を危機の理論として深めて、そういうものとして資本主義の変化をとらえようという試みがある。

一番大事なのは、さっきいったように、マルクスにはすべてが書いてあるからそれだけでいいのだということ、その裏返しとしての、マルクスは現代では古くなつたから全部ダメだということではない。マルクスへの接し方というのがやっといま始まった、ということではないでしようか。

